私自身もそれを目指して支援を続けていきたいと考えています。

国籍に関係なく、子どもたちが夢を持ち、夢の実現に向けて努力できる環境づくりが何より大切だと、ボランティア活動を通して強く感じました。

宇都宮市「かがやきルーム」のこと、私立長門高等学校就学科のこと

宇都宮大学教育学部准教授　丸山　剛史

Ⅰ．まえがき

昨年度（2013年度）、留学生の卒業論文指導を担当し、外国人児童生徒教育問題に関していくつか新たな知見を得ることができた。得られた知見は、HANDSプロジェクトにとっても無関係ではないと思われるので、ここに書き留めるとともに皆さんにお知らせしたい。

卒業論文を作成した学生さんは、中国・大連からの留学生で、ハンズ・プロジェクトの活動にも学習支援ボランティアとして3年間かかわってくれた。この学習支援ボランティアの経験から、卒業論文のテーマを「中国語を母語とする外国人の日本の学校教育への適応に関する事例研究」と定め、調査活動に取り組んだ。

論文では、さまざまな理由で来日し、その後、日本に長期滞在し、日本の学校に通い、日本で大学まで進学したり、就職することができた方々にインタビューを行い、学校教育への適応の過程において遭遇した問題と、その問題克服の方法を明らかにしようとした。

この論文は日本の学校教育への適応の成功例を検討しようとするものであり、事例を見つけ出すのに苦労したが、幸い4人の方にインタビューをすることができた。インタビューには、私も同席し、いくつか質問をさせていただき、私なりに理解を深めようとした。

以下では、インタビューした4人のうち、2人について、特にこちらが予想していなかった事項について記す。

Ⅱ．宇都宮市・「かがやきルーム」の役割

昨年度、宇都宮市内の小学校高学年に通学していたA君とその保護者にインタビューをした際、宇都宮市が独自に設置している特別支援教室「かがやきルーム」が意外な役割を果たしていることに気づいた。

A君は、日本で生まれたが、保護者の都合により、幼少時に中国と日本を行き来し、数年前から宇都宮市内に在住し、市内の小学校に通学していた。しかし、幼少時に中国と日本を行き来したため、日本語も中国語も十分に習得することができず、学校での生活にも困難を感じていた。授業の内容がわからず、友人もいなくて困っていたと話してくれた。また、こうした状況にあったためか、学校内でいじめられたこともあったという。しかし、学習支援ボランティアとして中国語を母語とする宇都宮大学の学生が学校に来てくれ、話を聞いてくれるようになり、状況が変わり始めたという。

困難克服の過程において有意義であったものとして、A君は、宇都宮市が設置する「かがやきルーム」をあげてくれた。A君は次のように話してくれた。

「宇都宮市教育センターから週一回に日本語を

教えに来る。でも、それだけで足りないので、学校のかがやき教室の先生や大学生のボランティアが自分の勉強のタイミングを合わせて教えてくれると、勉強の楽しさが現れます。言葉もだんだんわかるようになってきた。」

このように、A君は、宇都宮市教育センターの日本語指導ボランティア、宇都宮大学の学習支援ボランティアとともに、宇都宮市の「かがやきルーム」について話してくれた。

私は、この「かがやきルーム」の存在をまったく知らなかった。「かがやきルーム」は、宇都宮市の施策であり、2008年度から設置され始め、2013年度には小学校31校、中学校25校に設置されている。この教室は、通常の学級に在籍し、学習や生活上に困難を抱え、特別な支援を必要とする子どもたちが必要な時間のみ個別指導や小集団指導を受けられる教室であるという。満足感や達成感が得られたり、混乱した時に気持ちを落ち着けたりすることができるともいう。

A君は、通学する小学校に設置された「かがやきルーム」に行くようになり、ここで同じような境遇の、他の国籍の児童と知り合い、友人関係を構築することができるようになったという。学校において友人ができたので、いまでは学校生活が楽しくなったとも話してくれた。学習支援も重要であるが、こうした交流の場の存在がA君に学校生活への適応を可能にさせたのである。「かがやきルーム」の意外な機能に着目したい。

Ⅲ. 私立長門高等学校就学科における高校段階での留学生の大量受入

Bさんは、中国・山東出身、高校時代に山口県内の私立長門高等学校に通学し、同校を経て、日本の大学に進学したという。日本の高校を経て、日本の大学に進学したということで、私たちはその過程や詳細に関心を寄せた。

Bさんは、高校2年次から長門高校に就学生として学んだという。就学生というシステムの詳細はまだ確認できていないが、長門高校の受入方は示唆に富む。

長門高校では、Bさんのような就学生を、高校が設置した就学生専用の寮で受け入れ、ホームシックにならないように、中国人同士で一緒に居住させていたという。食事面でも配慮があり、時々、中華料理が出されていた。高校では、日本語、日本文化、礼儀作法など、日本の文化に関して学ぶ機会があったという。

また、高校では、日本人と一緒に遠足に行くなど、日本の生徒と就学生が共に学び、交流を深める活動が実施されていた。Bさんはこうした活動を経て、日本の高校生活に馴染んでいったと話してくれた。Bさんと一緒に来日した生徒は32名であり、1クラス分の生徒が受け入れられていた。

こうした長門高校の学習、生活両面にわたる配慮は、Bさんの日本の生活への適応だけでなく、日本人との交流をも円滑にしてくれたようである。Bさんは、長門高校を経て、日本の大学に進学するが、大学ではこうした配慮がなかったため、留学生は留学生で集まってしまい、日本人と留学生が継続的に交流することはなかったとも話してくれた。

2013年現在、長門高校は、普通科、商業科、就学科の3科を有している。同校の資料によると、就学科は1998年に設置されていたことがわかる。以前から山口県は中国の諸都市と友好提携関係を結んでいた。山東省と友好協定が結ばれるようになると、同省済南市に日本語の高校が設置され、同校生徒に日本での就学機会を与えることが計画され、長門高校で就学生の受け入れが始まったとされる。

学校の記念誌には、中国人教師を採用し、中国語授業を開始したことも記されている。現在でも商業科では中国語の授業が開設されている。

学校生活への適応を超えて、日本人と外国人児童生徒との継続的な交流を考えるとき、長門高校の取り組みはとても示唆に富むものであると思われる。